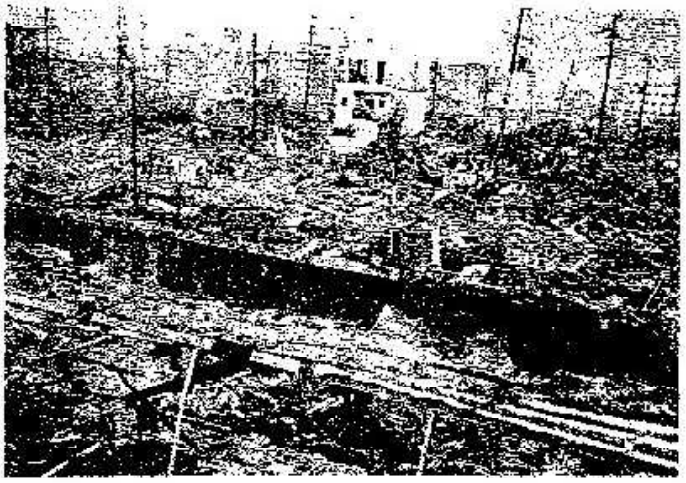
新生計画を
共に
歩む
ために・・・



1995年10月

顧問会

はじめに

１月１７日未明、４０何秒の瞬間が、多くの人々の生命を奪い、
多くの人々の持ち物を壊し、多くの人々を恐怖へと突き落としました。

また、多くの人々がその生きかたを考え、多くの人々が行動へと走り、
多くの人々が貴重な人と人との関わりに接しました。

それ以後、多くの人々が阪神・淡路を目指し、多くの人が
現在の文明を再考し、多くの人々が新しい未来へと動き始めました。

阪神淡路大震災・・・・・非常に大きな悲しみを伴い、
多くの人々の心を動かし続け、反省を強いてきたこの体験。
しかしながら、地下鉄サリンの事件やオウム真理教の事件、
あるいは、政治、経済、社会の激動する現代の流れの中で、
この体験はどう捉らえられ、
どう忘れ去られていくのでしょうか？

一方大阪大司教は２月２日、この阪神淡路大震災の出来事を
捉らえる方向性を、その「新生」基本方針の中で示しました。

事実や、出来事は、そのとらえ方によって、無意味にもなるし、
あるいは、人生を豊かにします。大司教は、この体験が
キリストの救いの十字架を示す事にもなると述べています。

大阪教区のこの「新生」基本方針は、私たちがどのように
この出来事を受け止め、あるいは生かして行こうとするのかを
示す公式見解です。また、大阪教区の２１世紀ビジョンを形作る
ものでもあります。

私たちも、大司教が示すこの方向性を、一人一人の中に消化し、
この未曾有の出来事を、単なる悲劇に終らせないように、、、、、
その思いを込めて、とりあえず、このささやかな冊子を皆様に送ります。
多くの資料の寄せ集めですが、何かのお約に立てればと思います。
また、機会をみて、次の企画を考えたいと思います。

１９９５年１０月

大阪教区　顧問会

新生計画を

共に

歩む

ために・・・

＊＊＊＊＊＊＊＊　もくじ　＊＊＊＊＊＊＊＊

新生計画とは何ですか？	P 3
震災を思い出す。	P 5
資料　新生計画までの教会の動き	P 7
資料　新生計画の展開	P 8
新生計画を考える	P 9
私たちの新生計画	P 11
新生を生きる典礼	P 13
資料　さらに歩むために	P 14
資料　新生を生きるために（１）	P 15
資料　新生を生きるために（２）	P 16
資料　教会新生の為の基本方針を理解するために	P 17
資料　新生の原点ーあの時の私たち	P 19
資料　証しに生きるために	P 21
資料　新生を共に生きるＮＩＣＥの精神	P 23
この小冊子を使われる方に	P 25

新生計画とは何ですか？

「新生計画、新生計画っていうけれど、何のこっちゃ」、、、こういった会話が聞こえそうな気がします。もう、地震から９ヵ月経ってしまいました。多くの人たちが継続して、この地震によって繋がったものとの関わりを続けています。

しかし、他方、多くの人々は、どのようにこの新生計画を進めていけばよいのかを、迷っているというのも現実の様な気がします。

今年９月の、司祭研修会で当時の教区顧問中川明師が、新生計画が出来てきた経緯を、次の３つの、震災後の出来事から説明してくれました。

① 共同体を作るのが嫌いな社会にあって、
教会の共同体作りが間違っていなかった
のだという確信と希望を持つ実体験をした。
思いやりが、混乱の中で秩序となった。
交通渋滞の中で、人間の関わりが優先
されて事故が少なかった。

② 若者の教会観へのチャレンジがあった。
当初の、教会の内むきな援助に対して、
青年達が抗議した。
「俺たちはこんなことの為に集まった
のではない」と。

③ 人々はしんどい思いをしている人たちに、
思わず手をさしのべた。
その人たちの顔に笑いが戻った。
赤ちゃんの入浴サービス、お風呂
のサービスなどで。

そして、この３つの点の、体験から、ＮＩＣＥ運動への確信が深まり、地域の人々と共に歩もうとする決意が高まっていったわけです。

大阪教区の８年前から始まったＮＩＣＥ運動は、地震の体験によって、これを更に一歩前へ進めて行くきっかけになった訳です。

そう考えて行きますと、一般の人々の中にもこの地震によって、人生観ががらりと変った人がいるように、この地震の大切な体験によって私たちのキリスト教会の行き方を、根源的に、真剣に求め続けて行く運動こそが、新生計画なのだと言うことが出来ます。

「地震の体験が、大阪教区全体の在り方を問うている」ー
その為に、私たちも、地震の体験を深め、味わい、広げて行きたいと思います。この新生計画は、そういった意味で、「新生運動」といってもよいのかも知れません。

だから、新生計画ははっきりとした具体的目標を、全て、洩れなく掲げた計画ではありません。現在は、大震災への、当面の方針にしかすぎません。地域と共に、人々と共に歩もうとするならば、その地特有の関わりの中で歩みつつ、常に探し求めなければならないのかも知れません。その地域社会との関わりを通して、教区のＮＩＣＥ委員会の大司教への答申にもあるように、新生への歩みの為の、「組織」、「養成」、「意識」の改革を行なわなければならないのかも知れません。

私たちが喜んで、自分の奥にあるキリストと共に歩む喜びを自ら味わい、伝えることが出来ますように、この新生計画の基本方針に現れた動きに、参加してみませんか？

震災を思い出す

新生計画の原点、被災地を今一度思い出しながら、そこで起った
出来事を確認し、再考し、新生計画の目指すところを、今一度確認しましょう。

Ⅰ　震災の体験を語る。

（１）　被災者・ボランティア・ビデオによる地震の体験談・情報を聞く。
＊市販のビデオ、「大阪教区震災リポート」、「鷹取からのビデオレター１・２巻」

（２）　地震の体験談・情報を聞いた後で、、、しばし感じてみる。

①地震の時、一人一人はどのように思い行動したか？

②その時、被災地で見た出来事は何か、その視点はどこにあるか？

③こう行ったことがあればよいと感じたことは何か？

④地震によって、変化したことは何か？

⑤その他気付いたことを書いてください。

（３）　以上の点をもとに、震災が人間に及ぼした影響を話し合ってみる。

Ⅱ　震災で発見したことを分かち合う。

（１）　震災関連の新聞記事や、各新聞社からでている写真集、カリタス大阪からでている冊子を読んでみる。

（２）　色々な視点から、この地震の対応を考えてみる。

この地震の中で、多くの人が協力、ボランティアをしました。
それに対してあなたは何を感じましたか？

この地震で、多くの人々の人間性が見えてきました。
あなたは何を大事にしたいですか？

怒りを覚えたこと、理不尽に思えたことは何ですか？

この地震は、「人をふるいにかけてその生き方をも問うた」と現地では
いわれますが、あなたの今までの生き方に、変化をもたらすことはありましたか？

私たちの社会で、不足していたものがこの地震で見えてきたとしたら、
それは何でしょうか？

この地震は、時間の流れと共に忘れられて生きます。
あなたは何を語り伝えたいですか？

（３）　以上のことをもとに、地震によって発見した大事なものを、
分かち合って見ましょう。

新生計画までの教会の動き

世界　日本　大阪

1962－1965　テーマ：現代化

第2バチカン公会議

対話、多様性、
聖と俗、全員参加、
キリスト中心、地方主体化

1972

社会に福音を

テーマ：教会は社会に対しての救いの普遍的秘跡

①みことばを伝える
②キリスト教的あかし
③キリストの共同体作り

1974

福音宣教

テーマ：
宣教は教会の本質的使命

教皇来日（東京、広島、長崎）

1984

日本の教会の基本方針と優先課題

テーマ：直接宣教の促進
社会の福音化

①教区、小教区の宣教共同体化
②教会の一体化
③ナイスの開催

1987

ナイス　1

テーマ：開かれた教会

1988

生涯養成コース

テーマ：相互養成

1991

大阪教区100周年

テーマ：共に生かし生かされて
翔け未来へ

1993

ナイス　2

テーマ：家庭の現実から
福音宣教の在り方を探る

1995

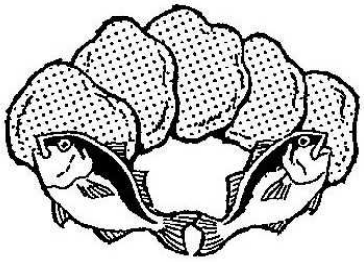
共同宣教司牧

テーマ：共同責任

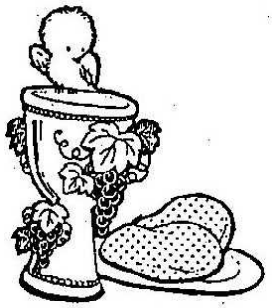
1995

新生計画

テーマ：交わり



新生計画の展開



全世界の
カトリック教会の動き
第2バチカン公会議 NICEI・II

大阪教区
新生基本方針

交わり
教会はまず共同体

各共同体の新生

小教区の見直し
小教区間の交流
被災地区教会の
為の拠出金
小教区評議会

共同宣教司牧
養成コース
地区、教区の
組織の見直し
青少年養成

交わりを広げて

被災地
新生計画
姉妹教会
ボランティア援助

地域
地域民との接点化
新生計画
小教区の地域ニーズ

社会
正義と平和の運動
滞日外国人
環境運動

アジア（世界）
戦後５０周年
カンボジア教会
養成への援助

「新生」基本方針　　１９９５年２月２日

1　大阪教区が目指す阪神淡路大震災からの「再建」計画は、単に震災以前の状態に復旧する事ではない。キリストの十字架と復活（過ぎ越しの秘儀）の新しい生命に与る「新生」への計画である。
2　これは、被災地、しかもその中で特に「谷間」におかれた人達の心を生きる教会を目指すことを意味する。
3　ここでいう教会には、小教区、修道院、諸事業体を含む。
4　神戸地区のみならず、大阪教区全体を組み込んだ新生への体制を作る事で、他地区も同じ姿勢をもつようになることを目指す。
5　具体的に際しては、全てが痛みを伴うプログラムであることとする。

新生計画を考える

「新生計画までの教会の動き」、「新生計画の展開」の図を見ながら、新生計画が、何を目指しているのかを考えてみましょう。

1　「新生計画までの教会の動き」の図を見て、感じた事は何でしょうか？

教会の動きに対して

日本の教会の動きに対して

大阪教区の動きに対して

全体的に

2　新生計画や、それが生み出される迄の動きを見ながら、新生計画はどんな原則の元に動いていると思われますか？
以下の言葉に、強く働いていると思われるものから順位付けをしてください。
また、その理由も挙げてください。

		理由
現実から汲み取る	(　　)	
社会の動きに敏感である	(　　)	
弱い立場を強調している	(　　)	
分かち合いを大事にしている	(　　)	
キリストを証する	(　　)	
教会の流れを大事にしている	(　　)	
その他（　　） 書き加えてください	(　　)	

3　2の結果を持ち寄り、グループで分かち合いましょう。

4　「新生計画の展開」の図を見て、感じた事は何でしょうか？

被災地の占める割合は？

新生計画の範囲についてどう感じますか？

ナイス運動との関係は？

その他感じた事は？

3　各共同体の新生の為に大切なものは何でしょうか？
「新生計画の展開」の図から考えてみましょう。
（各項目に丸を付けてみましょう）

	大切				大切でない
小教区の見直し	1	2	3	4	5
小教区間の交流	1	2	3	4	5
拠出金	1	2	3	4	5
小教区評議会	1	2	3	4	5
共同宣教司牧	1	2	3	4	5
養成コース	1	2	3	4	5
地区教区の組織の見直し	1	2	3	4	5
青少年育成	1	2	3	4	5

4　各共同体の新生の為に、他に重要な事があるでしょうか？
下にお書きください。

5　「新生計画の展開」の図を見ながら、交わりを広げて行く方向に
共感するものがありますか、または疑問に思うところがありますか？

共感するもの

疑問に思うところ

私たちの新生計画

1　教会の現状について、振り返ってみましょう。

①あなたの小教区では、生き生きとしている活動団体があると思います。
生き生きとしている原因は？又生き生きとしているとはどんなことですか？

あなたの教会では、組織が人の活動を生かしていますか？

②以下の質問は、教会の一般的な意識についていわれたものです。
あなたはこれらの指摘に対して、どう思われますか？
（そう思う　－５、どちらかといえばそうおもう　－４、どちらとも－３）
そう思わない－１、どちらかといえばそう思わない－２、いえない

1 真面目にミサにでる人だけが熱心な信者と思っている。	5	4	3	2	1
2 小教区・教区・日本の教会に関心が無い。	5	4	3	2	1
3 教会の役割、仕事には無関心。	5	4	3	2	1
4 司祭が教え、信徒は聞くもの。	5	4	3	2	1
5 信仰とは、自分と神との関係である。	5	4	3	2	1
6 教会は、何か安らぎを受けるところである。	5	4	3	2	1
7 今の教会に満足、変る必要はない	5	4	3	2	1
8 教会は、社会と共に歩む必要はない。	5	4	3	2	1

上の質問に対して、どこにその原因があると思いますか？

③私たち、キリスト者には、どんな養成が必要と思われますか？

④今の教会に何か、提案がありますか？

2　大阪カトリック時報９５年１０月号の一面を見ながら、私たちの小教区の中で、（あるいは地区の中で）教会の優先課題として出来ることは何でしょうか？

被災地区にたいして	例）被災地区の教会の人と出会う 継続したボランティアをする 被災地から発した叫びを受け止める
地域に対して	例）地域で教会に何を期待されているかを考える。 地域のコミュニティー作りに協力する
社会に対して	例）いのち、環境を大事にする運動と関わる 医療、福祉について考える
アジア・海外に対して	例）戦争を見つめ直す。 戦後５０年の日本の歩みを評価する

新生を生きる典礼

１００周年アイデア集参考

ミサに使える種々の工夫

テーマ：過ぎ越しの秘儀、回心

入祭の歌　　典礼聖歌　　６　あなたのいぶきをうけて
９　荒れ地のかわき果てた土のように
７６　神よあなたのことばは

集会祈願　（以下各祈願は復活節の祈願から取る。）

聖なる父よ、
あなたは、御子キリストによって新しい希望を世にお与えになりました。
主の、過ぎ越しの神秘を祝い、新生計画を生きようとする私たちが、
永遠の喜びへの道を、共に力強く進むことができますように。
聖霊の交わりの中で、あなたとともに世よに生き、
支配しておられる御子、
私たちの主イエス・キリストによって。アーメン。

ことばの典礼の部

聖書朗読の後、震災の時の、神のいのちを現す写真やもの、あるいは神のいのちに反する死を現すものを沈黙の内に眺める時間、あるいは、朗読を聞く時間を取る。

聖書朗読の後、震災の時の、体験談、を語り、そこに現れた福音的なものを分かち合う。

聖書朗読の後、私たちの生活を意味付ける価値観について、この震災がどのような変化を人々にもたらし、どのような生きかたを見つけたかを考える時間を取る。

奉納の行列

祭壇の前に、机を置き、生活に便利なものを並べる。奉納の時、それを一つ一つ、持ち去り、その代わりに、パンと葡萄酒と、水、献金など（他に適当なものも含めて）を置く式を行う。

平和の挨拶

新生計画が、交わりの教会を目指すところから、新しく来られた方、その共同体を訪ねてこられた方を、歓迎する。
挨拶の導入を、司式者は祭壇からではなく、会衆の中に入って呼びかける。

聖書箇所　福音書

ルカ　１：４６－５５	マリアの賛歌
ルカ　４：　１－１３	誘惑を受ける
ルカ　６：２０－２６	幸いと不幸
ルカ　６：４６－４９	家と土台
ルカ１５：　１－　７	見失った羊のたとえ
ルカ１９：　１－１０	徴税人ザアカイ
ルカ２２：２４－３０	いちばん偉いもの
ルカ２４：１３－３５	エマオで現れる
ルカ２４：３６－４９	弟子達に現れる

等々。

さらに歩むために

新生計画は、今までの長い歴史のあゆみの中で生まれました。だから、新生計画を生み出した色々な要素は、今も尚生きています。
以下に、私たちにとって、さらに歩むためのものを、紹介いたします。

＊生涯養成コース

大阪教区生涯養成委員会
全教区的なものと、出前コースなど色々な取り上げが出来ます。

新生コース	いち早く、２月には、基本方針に対してのコースが作成されています。 ナイスとの流れの一体性が説明されています。
家庭コース	新生の交わりは身近なものから
教会コース	広がりを育む新生教会へ
霊性コース	新生の信仰は共同体的なもの
社会コース	交わりは、社会に対して責任を負う事
青年コース	新しい新生の力を育てよう
百周年コース	教会の過去を見て、未来に向かう力を。
黙想会用コース	共同体的なチャレンジ心を確認しよう。
リーダー用コース	交わりから共同体を育てよう。
ＮＩＣＥⅡ後の信仰を生きる	

＊「百周年アイデア集①②③④⑤」

大阪司教区設立百周年記念委員会

基本方針	①Ｐ１０ー、②Ｐ２７ー、③Ｐ７ー、④Ｐ３５ー、Ｐ３９ー、Ｐ４１ー
共同体を育てる。	①Ｐ４ー、Ｐ１２ー、②Ｐ２５ー、③Ｐ９ー、Ｐ１１ー、⑤Ｐ２５ー Ｐ２７ー、Ｐ２９ー、
神戸と共に	⑤Ｐ１０
地域と共に	⑤Ｐ１５ー、
社会と共に	②Ｐ１１ー、④Ｐ１２ー、Ｐ２１ー、Ｐ２３ー、
アジアと共に（世界）	②Ｐ５ー、④Ｐ５ー、

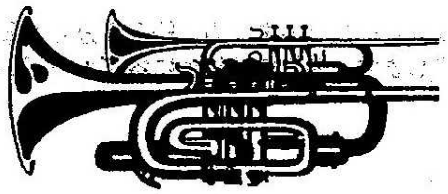
＊「ナイス２ - 家庭に向けてアイデア集」

大阪教区ナイス委員会

家庭	交わりの基本的な場の現実を見て、前に進むために⑤Ｐ７ー

＊「参加する教会におけるリーダーシップ」

中川明神父訳
小教区の評議会などの、共同責任や大人としての小教区での在り方を分かち合いを通して学ぶための資料。



「新生」を生きるために（1）

大阪教区が２月１日に策定した「教会新生のための基本方針」を、すでに皆様もご存じのことと思います。その具体的な内容は、のちほど（今日のプログラムのまとめの時に）確認させていただきますが、この教区方針を理解するためには、それぞれの信徒が自分の生活を振り返ることが欠かせません。「現実」を踏まえること抜きに、理解することは不可能だからです。

ＮＩＣＥ運動は、「現実に立脚する」ことからスタートしました。そしてより深い信仰を求めて、「証し」のうちに、社会の真っ直中で生きることを、教会の本来のあり方と考えています。

今回の大阪教区「新生」計画を理解するためには、このＮＩＣＥ運動の精神を理解することが不可欠です。今日のコースを通して、私たちがどのように信仰を証しして生きているかを、見つめていきたいと思います。

１．まず、私たちが信仰を生きる場、相手、証しのあり方を考えてください。

①どこで、

②どういう人たちとの中で、

③どのように証しするのか。

＊　上の３つの質問に対する自分なりの答えを、お配りする紙片に記入してください。
用紙を横長に使い、一枚に１項目を横書きで書いてください。③については、単語だけでなく、一通りの表現で書いてください。

2.. グループでの作業

各自が紙片に記入し終わったら、グループに分かれます。各グループごとに、模造紙にまとめを作ります。

①～③までを、それぞれで模造紙に貼りつけます。その際に、似たような内容のもの同士を集めて貼るようにします。

時間配分は、①説明：１０分　②個人での記入：１０分　③グループでのまとめ：約６０分でお願いします。午前中は、各グループで作業するところまでで終了します。午後のはじめに各グループからの発表を行い、さらに分かち合いを続けます。

「新生」を生きるために（2）

1．　はじめに「教区時報３月号」の「教区新生計画」についての記事をお読みください。そして、ピンと来るところ、理解しにくいところを指摘してください。その際に、先ほど発表していただいた「証しに生きる」のまとめに出されていたことを念頭に置いて考えて見てください。自分たちで作成した模造紙の中にあらわれていたことと、教区の「新生」に向けての歩みがどのくらい一致していると感じられるか、あるいはズレていると思うかを考えて見てほしいのです。

(1) 説明と振り返り

①一緒に教区時報を読む。簡単な説明も含む。

②振り返り

・証しする教会として、良いことだなあと感じる点。

・何かピンとこない（異論がある、反対である）点。

(2) グループでの分かち合い

（約７０分くらい、午前中のものと今の質問との関係で分かち合います。あとで全体の場で各グループで分かち合ったことの要点を発表していただきます。

「教会新生のための基本方針」を理解するために

今後生きている限り、1995年1月17日の大震災のことを忘れることはないでしょう。たった20～30秒の早朝の地震、約5400人を死なせ、十万軒以上の家を破壊したあの地震を、あの甚大な被害を、私たちは決して忘れないでしょう。

地震後の２月１日、大阪教区は、「教会新生のための基本方針」を策定しました。５項目からなるその方針は、以下の通りです。

1）大阪教区が目指す阪神大震災からの「再建」計画は単に地震以前の状態に復旧することではないキリストの十字架と復活（過ぎ越しの神秘）の新しい生命に与る「新生」への計画である。
2）これは被災地、しかもその中で特に「谷間」におかれた人たちの心を生きる教会を目指すことを意味する。
3）ここでいう教会には、小教区、修道院、諸事業体を含む。
4）神戸地区のみならず、大阪教区全体を組み込んだ新生への体制を作ることで、他地区にも同じ姿勢をもつようになることを目指す。
5）具体化に際しては、全てが痛みを伴うプログラムであることとする。

以下、この方針のもつ意味や意義を考えてみることにします。

1．今こそ真価が問われている

今回の大地震は、関東から九州までの大地を揺らし、ご存知のように、未曽有の被害を与えました。地震当日即座に教区として救援活動を開始し、その後、今に至るまで、出来る限りの努力をし続けています。

この出来事に対し、どのように対応し、どのように今後のあり方を求めて歩むのか、教会の存在意義そのものが根本的に問われ、この大災害から挑戦されていると認識させられます。被害を受けたところを単に旧に復するのではなく、今までよりもさらに一歩前進していくためにどう決断していくのか、確かに、今こそ教会の真価が問われているのです。

2．基本方針の理解のために

基本方針の各項目の要点は、１）が２）を中心に置くことを踏まえた「新生」の方向性であり、３）と４）がその範囲を示し、５）がその実施における特徴、という構成になっています。

５項目のポイントをつないで要約すると、次のようになります。

「大阪教区の教会（小教区も修道院も様々な事業体も含む）は、阪神大震災からの再建を目指すに当たり、神戸・阪神地区のみならず、教区全体の『新生』への体制を作ることとし、『谷間』に置かれた人たちの心を生きる教会となることを求めて、具体的に痛みを伴うプログラムを実施することを決定した。この計画は、キリストの十字架と復活に与るものであらねばならない。」

新生への方針が本物でなければ、この決定は拙速のそしりを受けることでしょうし、実現に向けて教区の全ての人々に共感され、共有されることはないでしょう。しかし、この選びが、ＮＩＣＥ運動の必然的な延長線上にあり、求めていた教会刷新の姿に結びつくものであるならば、この方針及び今後具体化される決定内容に光と希望を見いだすに違いありません。

新生が復活であるならば、そこには痛み（十字架）が伴わないわけがありません。痛みなしの新生はまがいものの蘇生であって、復活ではないのです。この新生に向けて、すでに痛みを訴える声が聞こえています。それは無縁の誰かの痛みの声ではなく、私たち自身の痛みとして感じているのです。

痛みの彼方に、21世紀を生きるキリストの教会の姿を希望のうちに見いだすことが出来ますようにと祈ります。

次に、ＮＩＣＥ運動の求めてきた要素を振り返ってみることにします。

3．ＮＩＣＥ運動が示唆する私たちの生き方

ここ十年余り、日本の教会は、教会の枠を超えてＮＩＣＥ運動を展開してきました。それは福音を証しし、宣教する教会として新たに生まれていくことを願う回心の歩みであったと思います。今回、

この大震災に対応する私たちのあり方も、このＮＩＣＥ運動の中から共通認識としてきた幾多の点と相通じるものがあることを確認したく思います。

(1) 現実に立脚して、

日本の教会が、ＮＩＣＥ運動を通して求めている原点は、「現実を踏まえて」ということです。今、ここで起こっている現実に目を向けずに、キリストの弟子として歩むことは出来ません。現実離れとはキリスト離れを意味し、現実を見ずに目をそむけることは、キリストのまなざしから目をそむけることになってしまうのです。

(2) 社会の中で、

私たちの現実とは、この日本の社会の中にあります。一人ひとりも教会共同体も、社会の真っ直中に置かれ、そこで示される啓示を読みとるのです。復活したキリストの霊に強められ、その目をもって現実を見つめ、社会の中を生き抜くのです。私たちがキリスト者であるのは、キリストとのきずなの中で、社会で生きているからであり、キリストを忘れて社会に生きることは、あの「遊離」そのものなのです。

(3) 弱い立場に置かれている人々とともに、

社会的な成功が競争に勝ち抜くことによって達成されるかに思える社会にあって、キリストの弟子として、イエスの生き方に倣いながら生きることが求められます。各自に与えられた可能性を開花させることが、イエスの生き方から遠く隔たってしまってはどうしようもありません。それぞれなりに与えられたカリスマを活かしながら、イエスのように、弱い立場に追いやられている人たちとともに歩むことこそ、現代における困難を感じればなおさら、私たちに迫ってくるキリストの愛のメッセージなのでしょう。

(4) 聖霊の導きを識別し、分かち合いながら、

分かち合うことなしには、教会はキリストの共同体になりえません。と同時に、聖霊の導きを見分けるセンスなしには、キリストの共同体になることは不可能です。神の民である私たちが、神の民であり続けるために、分かち合いは不可欠ですし、個人も共同体も識別しつつ歩む以外に道はありません。この生き方を通して神の恵みがさらに豊かに注がれることを、私たちはＮＩＣＥ運動の体験を通して実感しています。

(5) キリストを証しして生きる。

以上のような生き方を現実の社会において生きることは、キリストを証しして生きることにほかなりません。弟子として、主の歩まれた道をこの社会の環境や、条件の中で生きるのが、私たちが求める生き方です。祈り、みことば、御聖体などの秘跡によって養われ、霊の導きを識別して生きることは、証しに生きるように招かれていることを直感させます。識別し選びとった道を、一人ひとりが、そして共同体として一緒に歩むことが，ＮＩＣＥ運動が見いだした今後の「展望」なのです。

４．聖霊の導きを信じて

すぐに取り組むべき緊急の対応にも、中長期的な視点からの連続性のある取り組みが必要とされます。今回の方針決定は、震災後、急遽行われたことです。とはいえ、私たちが取り組んできたＮＩＣＥ運動と完全に一致したものであることは確かです。

私たち大阪教区の識別は、この「基本方針」でした。この方針の策定は、大司教様はじめ、教区顧問会の司祭たち、及び緊急に集められたわずかの信徒によって行われました。教区民全員が参加した訳ではありません。しかし、責任あるその人々の識別した決定は、「私たちの識別」とはならないでしょうか。

誰が識別しようとも、震災後の復興が、単なる復旧ではなく、より本物の教会建設となることを願うだろうことは、容易に推測できます。そして日本の教会が歩んできた歩みに一致したものとなることも、無理なく納得されるはずです。この決定がなされたプロセスを私たち自身が祈りのうちにかみしめることによって、聖霊によって同じ識別を体験し、検証することが出来るはずです。識別を促すのは、同じ聖霊だからです。この方針に聖霊の促しを見いだすことが出来れば幸いですし、その確かさを信じることが大切になると思います。

個々の対策には、さらに改善が必要になるかもしれません。ただ、今回のこの基本方針のもつ意味や、意義は変わることがないでしょう。教区を構成する一人ひとりが、この基本方針の実現に向けて、ともに聖霊の導きに信頼して歩んで行かれることを望みます。

「新生」の原点～あの時の私たち

早いもので、もうあの大地震から半年になります。あちこちで復興への動きが見られます。プレハブの店が元気に頑張っており、建築ラッシュであり、皆が忙しそうに動いていることなど、相変わらずの交通渋滞の中で、毎日の生活がとにかく活気に満ちています。

その一方で、仮設住宅に入居した人たちをめぐる悲報も聞かれます。それに、この暑さの中で公園でテント生活を続けている人たち、避難所で過ごす人たち、その人たちを追い立てる行政の冷たい姿勢。めっきり減ったマスコミの報道のせいもあって、同じ神戸に住んでいてもあの地震を忘れがちになっていますが、まだまだ残っている壊れた家やビル、あちこちに目立つ更地など、まだまだ大変な状況にある人たちのことを忘れるわけにはいきません。

震災後、すぐに行動を開始した大阪教区の「新生」への動きを、今日のこの機会にもう一度考え、振り返ってみようと思います。（つらい人もいるかとは思いますが）地震の体験を思い起こしながら、「あの時とその後の日々」から始めて、この新生の意味を見つめていくことに致します。

1．最初に、あの大地震の前後のことを思い出して下さい（答えたくない問いには、無理して答えなくて構いません）。

A．あの日のこと

(1) 1月17日午前5時46分に、あなたはどうしていましたか。

[　①起きていて～していた　②寝ていた　③寝ていたが目を覚ましていた　]

・起きていたならば、何をしていましたか。

(2) 地震で揺れている最中に、どのように感じ、何を思いましたか。

(3) すぐに停電して真っ暗になりましたが、地震の直後のあなたの行動や起こった出来事を思い起して下さい。何をしましたか。

(4) 明るくなってから、あなたはどう過ごしていましたか。

(5) ラジオや電気がもどったあとのテレビで、地震の被害の大きさを知って、どのうように感じましたか。

(6) あの日は、その後どのように過ごしましたか。

B．その後の日々

(1)その後の１～２週間のことで、心に残っていることはどのようなことですか。

(2)水道やガスが復旧し、ＪＲや阪急などの交通機関が動き出すまでの間の生活で、心に残っていることはどのようなことですか。

(3)困ったこと、悲しかったこと、有り難かったこと、うれしかったことにどのようなことがありましたか。

(4)地震によって、考えさせられたこと、学んだこと、気づかされたことが何かありますか。

(5)地震によって、自分の生活や意識、生き方に何か変化がありましたか。

(6)いろいろな意味で、忘れられないこと、忘れたくないことはどのようなことですか。

２．大阪教区は、地震当日に緊急対策本部を設置し、即座に救援活動を開始しました。

(1)教会が動き始めたことをいつ、どのように知りましたか。

(2)何か活動に関わりましたか。あるいは、十分にはできなかったにしろ、関わろうと考えましたか。

(3)教会が行った救援活動について、感想をお聞かせ下さい。

①積極的に評価できる点

②不十分であったと思う点

「証し」に生きるために

自分自身が信仰に生きることなしに、一体誰に信仰が伝わっていくでしょうか。とはいえ、変な反省ばかりしていても何も始まりませんから、私たちが自分の手本としている生き方を探ってみることにします。

ＮＩＣＥ運動は、「現実に立脚する」ことからスタートしました。そして、より深い信仰を求めて「証し」のうちに社会の真っ只中で生きることを教会の本来のあり方と考えています。現代においては、ますます「証しされる信仰」が求められており、証しの信仰に生きる喜びこそ、福音宣教のカギとなっています。日本に住む人々の求める「現世利益」への私たちの応答はそこにあるだろうと確信しています。

このプログラムを通して、私たちがどのように信仰を証しのうちに生きていくよう招かれているのかを見つめていきたいと思います。

♣「証し」に生きるとは？

私たちは、洗礼を受けたときに「洗礼名」をいただいています。その名はほとんどの場合、聖人から選んだことでしょう。

聖人を、「殉教者」と「証聖者」の２種類に分類することができます。殉教者の意味は「証し人」であり、証聖者の意味もそれに似た意味があることがわかります。どちらも信仰を証しして生きたことを公に教会が認めたことによって列聖された人たちです。

守護の聖人としてその特定の誰かの名をいただいたのは、私たちもまた、そのような生き方を生きていく模範やとりなしを求めていたからに他ならないのであって、守護の聖人は単なる西欧的なアクセサリー、ただの習慣ではありませんし、無論、困った時にだけ、特別に助けてくれるだろうと打算で付けたものでもありません（祈りにおいて、特に親しく交わることはあるでしょうが）。

多くの先輩の信徒、関わりのあった司祭や修道者、肉親などで、その信仰への忠実さや真剣さに心からの尊敬を寄せる人がいらっしゃることと思います。ある面では人間的な弱さもあったかもしれませんが、そんなこと以上に私に信仰を生きる上での「模範」を残してくれているならば、それを私への「証し」と考えることができるでしょう。

尊敬する人物にしろ、聖人にしろ、それらの人々の信仰には、「生き生きとした神との交わり」があったはずです。その人自身に根付いた信仰の深さが感じられると思います。その人が「味を失った塩」でなかったのは、神からの声に耳を傾けて生きていたからに違いありません。

私たちもまた、神との生きた交わりに召されてここにいるのですから、「受けた光を輝かせよ！」というみ旨に従って歩んでいきたいのであって、理由をつけて主の招きを断わるようなことはしたくないのです。感謝のうちに信仰を生きぬくことを、聞き慣れないことばかもしれませんが、「証しに生きる」ことだと理解して、このプログラムに取り組んで下さい。

作業：私たちが信仰を生きる場、相手、証しのあり方を探っていくことにします。
困難のうちにも、信仰を証しして生きた（ている）尊敬する人物・知人・友人などの姿を思い浮かべ、また自分自身も、どのように生きているかを合わせて考えてみて下さい。
♣次の４つの質問に対する自分なりの答えを、上の枠の中に記入してください。
(3)と(4)については、単語だけでなく、一通りの表現で書いてください。

	(a)尊敬する人物・知人・友人	(b)自分自身
(1) どこで、		
(2) どのような人たちの間で、		
(3) どういう困難の中で		
(4) どのように信仰に生きたか（生きているか）		

グループでの作業・

各自で記入した後、グループに分かれます。各グループごとに、模造紙にまとめを作ります。（まとめでは(a)と(b)を区別しなくてもかまいません）

模造紙に(1)～(4)までを分ける線を引き、そこに分かち合いで出てきた事柄をマジックで書き込んで下さい。後で発表していただきますので、よろしくお願いします。

（模造紙は２枚使っていただいて結構です）

時間配分は、

①説明：約10分　②個人での記入：10分くらい　③グループでのまとめ：約60分

といった目安でお願いします。

「新生」をともに生きるＮＩＣＥの精神～新生の第２段階へ向けて

１．ＮＩＣＥ運動から生まれた「新生」計画

あの大地震への大阪教区としての対応は、「新生」の基本方針とプランとに表れていますが、そこに出されている考え方は決して地震によって突然出てきたものではありません。ここ10年あまり日本中のカトリック教会で続けられているＮＩＣＥ運動の方向性の中から出てきた生き方、考え方から生まれたものなのです。

また、大阪教区では21世紀へ向かって、様々な懸案（青少年の信仰育成、小教区の活性化、教区全体レベルおよび各地区レベルでの「宣教司牧評議会」設置、社会正義への関わり、確実にわかっている司祭の減少への対応、地区における小教区同士の協力関係強化、人口移動に対応する小教区配置の再編、カトリック諸施設と教区との関係強化、各種委員会活動の連携、共同司牧、信徒の奉仕職、教区組織の再編成などのほか、まだまだいろいろあげられる）に取り組んでいこうとしていました。具体例として、今春から共同司牧を不退転の決意をもって実行し始めたことは、ご存じの通りです。

このような多くの課題に対して、ＮＩＣＥ運動の精神に立脚しながら、大阪教区として総合的に「21世紀ビジョン」として実施していこうとしていた矢先の大地震だったのです。そこで教区は、これから順に実施する予定であった計画を、地震への対応を中心に急遽練り上げた「新生」計画として発表し、司教館の売却を含めた大規模な教区刷新の断行を決意した訳です。

ですから、「新生」計画は阪神淡路大震災への対応として公表されましたが、その理念はＮＩＣＥ運動にあり（さらにその淵源は第２バチカン公会議）、神戸・阪神地区の復興にとどまらず、教区全体がハード面もソフト面も含めて21世紀に向かってどのように歩むかを示す総合的な計画なのです。この計画の目的は「福音宣教」にあり、多くの危機的状況を直視した上で、教会が日本社会に福音をのべ伝えていくために取り組むものです。

「新生」の基本方針は今後も堅持されますが、その具体的な方策は、主のみ旨の実現を求めて今後も識別しながら歩むことになります。以下にあげる基本方針の説明も、さらに多くの人々によって理解が深められ発展していくことになるはずです。教区のすべての人々にこの「新生」の基本理念を理解していただくとともに、この「21世紀ビジョン」＝「新生」計画であることを踏まえて、多くの方々の御意見を集約し、識別してともに歩む生き方こそ、福音にしたがって生きる私たちの道なのです。

２．「新生」計画の基本方針の意味

「新生」の基本方針をＮＩＣＥ運動との連動を意識して書き直してみると、次のようにその意味を説明することができるでしょう。

［基本方針１］大阪教区が目指す阪神大震災からの「再建」計画は、単に地震以前の状態に復旧することではない。キリストの十字架と復活（過ぎ越しの神秘）の新しい生命に与る「新生」への計画である。

「新生」計画は、今回の阪神淡路大震災への教区の対応として実施していくが、地震の被害からの復旧を目的とするに止まることなく、教会が、現在および将来の社会に対してさらに福音的なものとなっていくことを目的とする。

私たちは様々な立場をもってこの社会の現実の中で生きているが、福音に支えられた信仰を生きることの難しさ、信仰を伝えていく困難さ、キリストの現存を実感できる教会共同体づくりのたいへんさを味わっている。そうした状況の中で遭遇した今回の大地震を契機に、この状況にチャレンジし、よりいっそうキリストの教会になっていくように招かれていることを感じている。

［基本方針２］これは、被災地、しかもその中で特に「谷間」におかれた人たちの心を生きる教会を目指すことを意味する。

被災した人々への手助けを行うことは、そもそも人間としての義務と言えるでしょうが、今回の緊急援助活動の持つ意味はそれにとどまらず、人間らしい生活から疎外されているすべての人々への奉仕に生きる教会の使命に添った行動でした。
福音の使命を生きる教会の実現のために、「貧しい人々への優先的関わり（Option for the Poor）」を選択している世界の教会と共通した方向を目指し、「弱い立場に置かれている人々」と、ともに生きる教会を造り上げることを目指すことになる。「特に『谷間』におかれた人たちの心を生きる教会を目指す」とはこのことであり、今まで以上に組織的にこのことに取り組んでいく。

［基本方針３］ここでいう教会には、小教区、修道院、諸事業体を含む。

教会が「交わり」の輪を広げていくことは、自閉的なタコ壺からの脱却を意味し、小教区、地区、教区、また修道院やカトリック学校などの諸事業体が、名目ではなく実質的に同じ方向で、それぞれの場にありつつ、ともに歩むことを目指すことになる。今までは、ともすると、「一緒のようでいて別々で、別々のようでいてなんとなく一緒」であった関係をもっと深め、ともに、しかも別の場所で同じ方向で歩んでいくことを大切にしたい。
またこの「交わり」は、地域社会をはじめとする日本社会の現実に対して、今まで以上に積極的に関わっていくことを求める。

［基本方針４］神戸地区のみならず、大阪教区全体を組み込んだ新生への体制を作ることで、他地区も同じ姿勢をもつようになることを目指す。

それゆえ、この「新生」は地震で被害を受けた神戸・阪神地区への他地区・小教区からの物心両面の援助活動の実施に止まらず、共同司牧の開始にも表れているように、21世紀を展望する大阪教区全体のあり方を求めていくものとなるであろうし、そうあらねばならないと考えている。
当然ながら、その歩みは信徒、司教、修道者、司祭が協働するものであり、さらに福音的な人間社会の実現に向けてすべての人々との協働を指向するものとなる。教会内においては、共同責任を担うために、信徒の協力と貢献（信仰共同体を維持し支えていくとともに、社会正義の実現への働きや宣教の第一線に信徒が立ち、司祭に依存するのではなく、司祭と協働しながら自立して歩むこと）がさらに要請されることになる。
さらに、今後の福音宣教に向けて教区としての司祭配置の方向を考えると、小教区の改廃（マクロ的に見れば、人口減や司祭の減少からやむを得ないが、該当する人たちにとっては堪え難い思いを起こさせる）や人口急増地域への新設は避けて通れないことであり、教区の諸活動の再編成も考えねばならない。共同司牧の開始は、ますます信徒を中心とした信仰共同体づくりが司祭の協力のもとに行われることが急務となっていることを示している。小教区の改廃や新設などの痛みを伴う改革の成否の要はそこにある。信徒も司祭も、21世紀における教会の福音宣教の使命をいかに果たしていくかを共通の目的にして、それぞれに意識を深め、組織を見なおし、さらなる養成を心がけることが求められている。

［基本方針５］具体化に際しては、全てが痛みを伴うプログラムであることとする。

福音の目指す社会のあり方を求めて歩むことは、避けがたく「痛み」を伴うことになる。これは日本の教会全体が選び取った信仰の確信によるものであり、その「痛み」にこそ復活へつながる御父のみ旨を、私たちは見出だすのである。具体的な方法は絶えず共同での識別を必要とするが、その選びに痛みが伴ったとしても、あえてその道をともに歩むことの中に、私たちの「証し」がある。

✠この「新生」への道を、「交わりと証し」をキーワードに、聖霊の導きを確信してともに歩んでいくことができますようにと祈ります。

この小冊子を使われる方に

①この小冊子は、新生計画を各小教区で具体化するために役に立つようにと考えてみました。この作業で出てきたものを、又地区、教区へと提案くだされればありがたいと思います。

②「地震を思い出す」では、地震の時に発見した人間として大切なことに、目を向けたいと思いました。それは、カトリック信者というだけでなく、社会の持つ福音的なものに目を向けるためです。その視点は、新生計画を作り出した原点と言えます。

③２つの資料、「新生計画までの教会の動き」と「新生計画の展開」は、ＮＩＣＥと新生計画が如何に結びついているかを現したものです。ある教会では、独自の図柄を作り出し、分かち合ったと聞きました。２０年前からの教会の具体的な動きを、皆で振り返ってみてもいいのかも知れません。どこに動こうとしているのかが見えてくると思います。

④「新生計画を考える」では、③の２つの資料を中心にどういった展開が出来るかを考えるものです。新生の基本方針を一つ一つ考えていくことも大切になると思われます。新生計画が被災地だけにとどまらないことを、意識して頂ければありがたいと思います。

⑤「私たちの新生計画」では、ＮＩＣＥ２委員会の答申をもとに、組織、意識、養成という観点から振り返りながら、現状を越えた教会を浮び上がらせようとしました。ＮＩＣＥ委員会の答申を、一読し分かち合うと言うことも必要かも知れません。現状認識は、ある意味で、どこに動こうとしているのかも知らせてくれます。

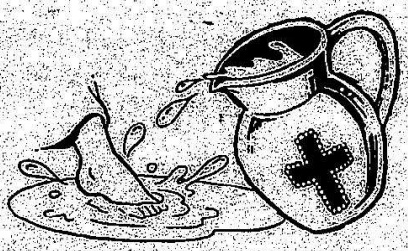
⑥「新生を生きる典礼」では、この新生計画が大阪教区にとって、復活へと向かうチャレンジであることを、基本方針の精神の中で色々と工夫してくだされればありがたいと思います。聖週間から復活祭の典礼は、新生を考える時にも役に立つヒントが多くあると思います。

⑦「さらに歩むために」では、いままでのＮＩＣＥにそったアイデア集が、新生計画の為に充分生かすことが出来るために、資料として上げました。

⑧その後に続く資料集は大阪教区生涯養成コースのスタッフからの提供のものです。
多くの出前コースに使用したものですから、皆さんのお役に立つものと思われます。

⑨時間配分に関してですが、それぞれのグループでの持ち時間に応じて、質問をカットしてくだされればありがたいと思います。気軽に、一つの質問でも取上げて頂ければと思います。話し合いではゆっくりと時間を取った方がよいのかも知れません。

又、作業のやり方ですが、個人の実感をまず充分に出すことが大事だと思われます。
その後の分かち合いでは、多くの意見と実感とをグループの目の前に置くと言う作業です。議論にならないようにしたいものです。

⑩本当に、寄せ集めと、とりあえず出さなくてはと思い立った動機での小冊子です。
この小冊子を意識せずに、皆さんの間で教会をどうしたいのか、どう地域の人々に答えていけばよいのかを考えること自体も、新生計画の部分だと思います。

新生計画は、被災地で見えてきた教会の求められている部分と、社会の見えなかった不充分な部分とを、私たちの足元から見ようとしていくものです。被災地を意識しながら、ともに大阪教区として果たす役割を考えて行こうと思います。